

『道徳授業づくり研修会in弥富市(5/7)参加者感想・意見・質問等』

【第3回公開分(最終)】

No.31 大府市小学校・T I 先生

道徳の教科化に向けての話から、授業づくり、模擬授業など「道徳のここが学びたい！」が詰まった研修会で、とても勉強になりました。これからもっと勉強して、多くの人と一緒に学びたいと思いました。

★T I 先生からは、当日の夜、次のようなラインが送られてきました。

「今日は貴重な研修会ありがとうございました。こうして中村先生や竹内先生が学びの場を作ってくださいるので、本当にありがたいです。中村先生の道徳に対する熱い思い、とても伝わりました。話も聞いていてすごく分かりやすく、さすがだなと感じました。

竹内先生の模擬授業はいつも勉強になります。あのやりとりをした場面では、『こんな感じで問い返しをするのか』、『こんなふうに友達の意見をつなげていくのか』と本当に勉強になりました。いい経験でした。

今、道徳の話を聞いてるだけでも、とても面白いです。」

No.19 弥富市中学校・Y K先生の質問への回答

※感想は、第2回分に掲載

【質問】

「道徳性が高まった授業になったのか」は、どういうところで判断したり、反省したりすればよいのでしょうか？

《竹内先生から》

評価とつながるところですね。こういう視点で道徳授業を考えられるというのは、レベルが高いと思います。ぜひこれからも「ねらいは達成できたのか」「道徳性は高まったのか」というところで振り返りをしていくと、よりよい道徳授業作りができるかと思います。

自分ですと、

- ・書かせたもの（特に授業の最後のほうで書かせたもの）を読んで、道徳性が高まったか、書かれた内容で判断します。

また、授業自体の反省もします。

- ・主観としては、児童生徒の授業中の様子、表情、発言、から判断し、反省をします。

でもこちらは主観ですので、根拠としては弱いかもしれませんが、道徳の場合は、この主観も大事にしたいな、とは思っています。

- ・〇〇くんがこんな意見を言って、クラスの大勢がはっとした顔をした。

- ・〇〇さんの意見に、教師も心揺さぶられたし、生徒も意見をつけたしながら心が揺れていたようだった。

また、生徒からこんな意見が出た、こんな話し合いが進んだ、これも判断できると思われま

《中村の補足》

‘そもそも論’から言って、1時間の授業で児童生徒全員について道徳性が高まったかどうかを判断するのは難しい（正直に言えば、無理である）と思っています。しかし、評価は大切です。なぜかと言えば、私たちの授業を改善していくために必要だからです。その授業改善に向けて授

業評価をしていくために集めていく児童生徒の様子蓄積が、これから求められる「児童生徒一人一人に対する評価」の材料に十分なり得ると思います。

評価の対象とするものは、竹内先生が書かれたとおりです。私も、授業の最後の方に書かせたものを重視します。毎時間、必ず書かせます。(小学校の低学年でも、行数を少なくすれば次第に書けるようになってきます。)ただし、書かせ方に気をつけます。「今日学んだことを書こう」という指示は出しません。「学んだ」というだけで構えてしまい、本心ではない、建前的なことを書いてしまう児童生徒がいるからです。教師は、成果がほしいから、すぐに「学んだこと」を求めてしまいがちですが、道徳に即効性はありません。すぐに現れてくるものは、すぐに消えていきます。文部科学省も、「長いスパンで評価する」と言っています。

それよりも、「今日の1時間の授業の中で感じたことを書こう」という指示を出します。初めは何を書いたらいいのかわからない子もいますが、次第にこちらが求める書き方ができるようになってきます。例示もしますが、それよりもいいのは、良い書き方、良い内容の紹介です。そうすると、多くの子がそれをモデルにして書くようになっていきます。中には、「あの部分は分からなかった」とか「あの部分はもっと時間がほしかった」というようなことを書いてくれる子もいます。これは、すぐに授業改善に役立ちます。

そして、もう一つ、授業改善のために重視しているのは、子どもたちの発言内容以上に、子どもたちの表情です。子どもたちの表情で、授業のほしいの成否が分かります。ほしいでいいのです。ただし、教師の思いが重要です。自分の授業に対する評価ですから、厳しく見る必要があります。子どもたちの良い表情よりも、良くない表情に気を付けます。「この表情はよくなかったなあ」「ここはみんなこちらを向いていなかったなあ」というふうに見て行きます。

意識していけば、子どもの表情から自分の授業の評価は、ある程度できます。そのためには、学級全体の子どもたちの様子をいつも見る癖をつけていかなければなりません。

以上は、中村がこれまで実践してきたことであって、あくまでも参考にさせていただきたいという内容です。これからもいっしょに学んでいきましょう。

 **最後に、弥富市内小学校Y O先生からの感想の紹介です。** 

たくさんの質問をお寄せいただきました。質問への回答を後半に掲載しました。

No.32 弥富市小学校・Y O先生

中村先生、竹内先生、本日はありがとうございました。明日、すぐにでも道徳授業をしてみたい！と思いました。

中村先生のプレゼンをうかがえたことで、今後の道徳の方向性が自分なりに見えたように感じました。また、ワークショップは本当に楽しかったです。他の先生方の意見をお聞きできる機会はずいぶん新鮮でした。

自分自身、「特別の教科 道徳」となることで、これから道徳の授業回数(量)は増えると思いました。そこで、さらに子どもたちが「道徳っておもしろいな」と思う気持ちや、道徳的価値を知識としてだけでなく、行為・態度へつなげようと受け止められる気持ち(即効性はなくてよいので)をもてる授業(質)がいかに行えるかと言うことに重きを置いて進めていきたいと思いました。また、A. L. も急に尻すぼみした印象をもっていました、「教師自身がアクティブラーナーであること」は変わりなく大切であるということにも気づけました。

中でも印象に残ったのは、「感じる」の大切さです。『心と心のあく手』の中で、自分は「本当の親切とは何か？」という部分を中心発問として展開を考えていました。この発問でもそれなりに意見は出ると思っていたのですが、最後に先生のお話を伺って「感じる」＝「ぼく」の心に寄りそうという部分がないと思いました。ここで、質問をさせてください。

【質問①】中心発問を考える際、中心となる人物の感情に関する部分に着目して発問を設定するとよいのでしょうか。（『偽りのバイオリン』でも、フランクの涙に中心発問がありましたので。）

【質問②】この読み物資料は中学年での設定ですが、内容を読み取っていくと、「相手の立場にたって親切にする」という高学年の内容項目に近いように思ったのですが、中学年での取り扱いになっていることに何か意図はあるのでしょうか。

実は、これまで読み物資料を使って道徳の授業を行うことに非常に抵抗がありました。理由は、国語の読解との違いを自分の中でうまくわけて考えることができなかつたからです。しかし、本日、授業の組み立て方を学べたことで、その違いが分かったように思います。ここで、また質問をさせてください。

【質問③】現在は、視聴して進めていく道徳資料もあります（例えばNHK for School など）。このようなものについて先生はどうお考えでしょうか。

第3部、竹内先生の模擬授業は、実際に45分全て体験してみたいと思いました。子ども同士をキーワードで繋いでいく対話術、もっと知りたかったです。補助発問をたくさん用意されていても、子どもの意見や考えで全ては使われないという姿勢、コーディネーターとしての立場を学ばせていただくことができました。また、最後の振り返りは、子どもたちにとって、自分自身を深く見つめ直す時間、自分の価値を深められる時間となるのではないかと感じました。この時間こそ大切なのかなと思いました。ここで、またまた質問をさせてください。

【質問④】『偽りのバイオリン』で、手紙を書くか、書かないかという発問がありました。もし、自分が生徒だったら、「私は、手紙を書かないのではなく書けない、だから、会いに行くと思う、でも、多分何も言えないと思う」と答えそうです。このようなことを言った子どもがいたら、先生はどのように授業を進められますか。

とりとめのない、長い文章を送ってしまい申し訳ありません…。質問も、その時に自分が感じたことを挙げてしまったので、うまく伝えられていなくてすみません。

本日の3時間は自分にとって大変濃密&充実した時間でした。次回、機会があれば、また是非参加させていただきたいと思います。本当にありがとうございました。

【竹内先生からの回答(感想も含めて)】

昨日は、ありがとうございました。また、丁寧なメールを中村先生宛にいただき、ありがとうございます。質問もつけてくださいましたので、私が感じていることを少し書かせていただきます。

中村先生のプレゼンをうかがえたことで、今後の道徳の方向性が自分なりに見えたように感じました。また、ワークショップは本当に楽しかったです。他の先生方の意見をお聞きできる機会は中々ないので新鮮でした。

そうですね。他の先生方とあのように、わいわいと、授業作りを語り合うことができるのは、幸せですね。あの時間こそが、力量向上につながりますよね。「そうか～、この先生はこんなふうを感じるんだなあ…」。そう思えることが、幸せですし、いろんな意見に触れることができている楽しいですね。

中でも印象に残ったのは、「感じること」の大切さです。『心と心のあく手』の中で、自分は「本当の親切とは何か？」という部分を中心発問として展開を考えていました。この発問でもそれなりに意見は出ると思っていたのですが、最後に先生のお話を伺って「感じる」＝「ぼく」の心に寄りそうという部分がないと思いました。ここで、質問をさせてください。

感じることの大切さ、私も同感です。よい学びでした。

Q1. 中心発問を考える際、中心となる人物の感情に関する部分に着目して発問を設定するとよいのでしょうか。（『いつわりの・・・』でも、フランクの涙に中心発問がありましたので。）

そう思います。

中心発問は、中心となる人物が、感情が揺れ動くところ、気持ちが変わるところをねらうとよいと思います。多様な価値が出るところがよいと思います。

分かりやすいところでいうと、主人公が、低い価値であったところ、助言者の出現により、何かに気づき気持ちが動くところ、という感じでしょうか。

Q2. この読み物資料は中学年での設定ですが、内容を読み取っていくと、「相手の立場にたって親切にする」という高学年の内容項目に近いように思ったのですが、中学年での取り扱いになっていることに何か意図はあるのでしょうか。

これについては、中村先生からぜひ回答していただきましょう。

中学年、高学年のしきりはあまり考えていなくて、きっと児童の実態に合わせてねらいを定めていけばよいのかな、とは思っています。

Q3. 現在は、視聴して進めていく道徳資料もあります（例えばNHK for Schoolなど）。このようなものについて先生はどうお考えでしょうか。

資料は、道徳の授業においては「きっかけ」と考えています。深くある項目について考えさせるためのきっかけとしてであれば、視聴覚教材もとても有効だと思います。見せるだけ、というのとはあまりよくないですが何かを考えさせるきっかけとして扱えばOKです。

Q4. 『いつわりの・・・』で、手紙を書くか、書かないかという発問がありました。もし、自分が生徒だったら、「私は、手紙を書かないのではなく書けない だから、会いに行くと思う でも、多分何も言えないと思う」と答えそうです。このようなことを言った子どもがいたら、先生はどのように授業を進められますか。

まず「どうして書けないのか？」と問い、深くその生徒の気持ちを考えさせます。書けない理由があると思いますし、そこを聞くことで、本音に迫れると思います。また、反駁として「会いに行くのは、手紙よりも、もっと緊張するし、もっとしんどいのでは？それでも行く？」と問い、それが、この生徒の「生き方」なので、その生き方を聞きます。

「だって、手紙だけでは卑怯だと思うし」「やっぱり恥ずかしいけれど、あって話をしたいし」「会うことが礼儀」「自分がよりいっそう強く生きるためには、やっぱり会わないといけない」そんな意見が出れば、それがそのまま、生き方を考えることにつながると思います。

そういうやりとりをして、「うーん」「なるほど」と言いながら聞いてあげて、「今の〇〇さんの生き方、どう思う？」などと、周りに問い返します。

こんな感じかなあ…。まあ、その場にはいないとなかなかわかりませんが、こんなふうに聞いてあげたいな、と思います。

またぜひ、道徳について話し合しましょう。

【中村の回答・補足(感想も含めて)】

日曜日の研修会へのご参加、ありがとうございました。

さて、先生からの質問を読んで、「先生ご自身の質問が凄い！」と思いました。視点・着眼点が凄い。先生からの質問だけで、1回の研修会ができるくらいです。

質問に対しては、竹内先生がとてもうまく答えてくれているので、自分からお伝えすることはあまりありませんが、少し補足として述べさせていただきます。

〈Q1〉中心発問を考える際、中心となる人物の感情に関する部分に着目して発問を設定するとよいのでしょうか。(『偽りのバイオリン』でも、フランクの涙に中心発問がありましたので。)

竹内先生の言う通りです。付け加えるなら、「感情」は「心の現れ」です。“涙”であったり、“ほっとした”であったり、“はっとした”であったり、…。しかし、言葉にはなっていません。山場の主人公の感情の現れを取り上げ、それを子どもたちに自分が感じたまま言葉化させると、ねらいに迫り、また、多様な意見が出てくることが多いです。これは、これまでの経験からつかんだ道徳の授業を進める上での一つの「コツ」のようなものでもあります。

逆に、例えば「心と心のあく手」で、ストレートに「本当に親切とは何か」と聞いてしまうと、子どもたちに考えさせたいのはそこなんだけれど、実際の授業ではありきたりの(教師の予想の範囲内の)意見しか出てこないような心配があります。教師の予想を超える意見が出てくることを楽しみ、それをいかに拾い上げて授業をするかが教師の腕の見せ所だと思って、道徳の授業をしています。(それでも、うまくいかないことが多いですが…。)

〈Q2〉この読み物資料は中学年での設定ですが、内容を読み取っていくと、「相手の立場にたって親切にする」という高学年の内容項目に近いように思ったのですが、中学年での取り扱いになっていることに何か意図はあるのでしょうか。

先生のお考えのとおりです。まず『心と心のあく手』の内容自体が、3、4年生でも十分理解できるものなので、3、4年生に上がっていると思います。また、この資料を使って、3、4年生なりに「親切・思いやり」について考えることができるので、3、4年生の資料として扱っていること自体はおかしくないと思います。しかし、これを5、6年生で使ったら、子どもたちはもっと深いところまで考えることができます。

実際に、私は昨年度の3学期にこの『心と心のあく手』を4年生の2クラスと5年生の1クラスでやりました。やはり、5年生の方がはるかに深い授業になりました。

内容が十分に理解できるのなら、資料はどの学年で使っても構わないと思います。指導者側の問題であり、どう扱うか、ねらいをどこに置くかは、指導者の決めるべきことだと思います。

〈Q3〉現在は、視聴して進めていく道徳資料もあります（例えばNHK for School など）。このようなものについて先生はどうお考えでしょうか。

これは、全く竹内先生の言う通りです。読み物だけではなく、詩でも、ビデオでも、新聞記事でも、漫画や写真ですら道徳の資料になりますし、そんな授業例はいっぱいあります。

ただ問題は使い方です。私が道徳の話でよく使う言葉に「道徳では何でも資料になるが、何でも資料として使えるわけではない」というのがあります。つまり、どんな内容の物でも資料になり得るけれど、そのままでは道徳の資料としては使えないものがあるということです。

例えば、指導者がどんなにいい内容の資料だと思っても、クラスで理解できない子がいるような難しいものはダメです。また、ビデオのものは長過ぎて、その視聴に時間をとられ、大事な話し合いに時間がかけられないということがあります。

〈Q4〉『偽りのバイオリン』で、手紙を書くか、書かないかという発問がありました。もし、自分が生徒だったら、「私は、手紙を書かないのではなく書けない だから、会いに行くと思う でも、多分何も言えないと思う」と答えそうです。このようなことを言った子どもがいたら、先生はどのように授業を進められますか。

これも竹内先生が言う通りだと思います。そして、私だったら、こういう「会いに行く」という発言こそ認め、取り上げ、全体の話し合いの場に出します。最初の発言者が「会いに行っても、何も言えないかもしれない」と言ったとしても、他の子がその中にある道徳性を見つけてくれるだろうと思うからです。

実際に、研修会で少し話題として出した小学校中学年の「絵葉書と切手」を使った授業を見ていたら、親友に出す手紙に未納のことについて書くか書かないかという議論になった時、ある男子児童が「僕だったら会いに行って話をする」と言い出しました。すると、他の子たちもどんどんそちらへ傾いていったのです。子どもたちは、「親友だったら、会えば気持ちが通じる。」「親友だからこそ直接会って話をした方がいい。」と考えていきました。子どもたちなりの友情についての考え・思いの現れです。

私たち教師(授業者)は、子どもの発問を予想して授業計画を立てますが、私は個人的には、その予想を超えるような発言が出る授業の方がいいと思っています。その予想を超えた発言をうまく取り上げていくと深い授業になって行くことが多いと感じています。しかし、それを取り上げるためには教師の力量を高めていかなければなりませんけれど…。

長くなりました。理論的にすべて正しいのかと言われると、自信はないのですが、すべてが自分の経験とたくさんの授業を見てきた結果でつかんだ一番現場に根ざしたものだとは思っています。参考になれば幸いです。